

## 【概説:エスタ・ビックの追憶】 ～死の本能、そしてレジリアンス～

山上 千鶴子

あの当時の彼の地でのこと、私が【タヴィ】に在籍していた1970年代の後半だが、Mrs.エスタ・ビックは‘ドラゴン’とわれわれタヴィの仲間内では綽名されていた。畏怖の対象であった。だが、どうやら【タヴィストック】に関連しての人脈において隠然たる勢力があったものと思われる。彼女の元にはタヴィストックの研修生が足繁く日参していた。その‘ドラゴンの巣窟’ともいえる彼女のお住いは、たまたま私が住んでいた Fairhazel Gardens の道路隔てた斜め向かい側のフラットの4階なのであった。或るときのこと、私は【タヴィ】からの帰宅途中の路上で、とんでもない奇異なものを目撃している。それは腕にファイルを抱え、手鞆を提げた、若くもない女性が一人小走りに私の方へ歩いてきた。彼女の顔はもう涙でクシャクチャで醜く赤らんでもいた。見るからに尋常ではない。明らかにそれは Mrs.ビックのフラットから出てきた、タヴィストックの研修生の誰かであろうとすぐさま察知された。私は目を彼女から逸らし、素知らぬ顔で通り過ぎたが、内心 Mrs.ビックならぬ‘ドラゴン’がまた火を噴いたのかと思った。だが、彼女の何がお気に召さなかったとしても、誰かを(いい歳でもあり、経験もそこそこなくもなかろうあの研修生を)あれほど気を動転(upset)させるほどに脅したりできるものかと私は内心訝り、当然ながらそうした彼女を私は許せないと憤った。それは、あの閑静な住宅地での唯一の‘汚点’として私の記憶に忘れ難く刻まれている。そして、私が Mrs.ビックとのご縁を結ぶには至らなかったのは当然のことなのだ。

それから40年近くの時を経て、ここに【タヴィストックからの贈り物】で乳幼児観察を振り返り、タヴィストックの乳幼児観察といえばそのパイオニアとしての Mrs.ビックの存在を無視するわけにもゆかず、マーサ・ハリスやらマーガレット・ラスティンやら、Mrs.ビックのお弟子さんとして薫陶を受けた人たちに私は手厚く教え導かれたわけだから、ただの食わず嫌いで Mrs.ビックを避け続けるのもどうかと思い、今頃になってようやく彼女の、そしてさらには彼女のお弟子さんたちの論文を読み漁ってみたのである。

それで一つ感銘深く覚えたことがある。それは、彼女が「死の本能」というフロイト以降この業界でも不人気な概念に苛烈に、飽くまでも臨床的スタンスで立ち向かった人であったという事実である。それはメラニー・クラインから手渡された「S(シャーンドル)・フェレンツィの遺産」であつたらうと私には思われた。Mrs.ビック自身はなんらそれに言及してはいないし、又他の誰かがそれを指摘してるわけでもない。かつてM.クラインの前に彼女が分析を受けていたというマイケル・バリントへの言及も一切見られない。フェレンツィとの絡みで敢えて彼の業績を斥けたのだろうか。解せない。唯一ここに翻訳を試みた Judith Jackson & Eleanor Nowers の論文【早期対象関係性における‘皮膚’の再評価】(2002)の中に一つ素っ気無くフェレンツィの論文への言及があつたので、あらっと目を瞠ったのだが・・・ここで Mrs.ビックの貢献としては、是非この点を強調してみることが肝要と考えられる。死の本能論は、クライン派精神分析家の護持すべき中核と考える。この点、疑いもなく Mrs.ビックは、フロイトーフェレンツィーメラニー・クラインの正当な継承者であろう。フロイトの理論の中でも不人気と称されている「死の本能論」を Mrs.エスタ・ビックほど遮二無二本気に取り上げたひとはいなかった。クライン派の死守すべき‘最後の砦’でもあると私には思われる、これこそがむしろ彼女の独壇場であつたとすら言えなくもない。

誰も敵(かな)わない。メラニー・クラインですらも、その人となりは彼女に比べると悲劇性が薄いし、さほど苛烈とも思えないといった感じなのである。

Mrs. ビックは、誰にでも威圧的かという全然そうではなくて、相手によっては上機嫌で実に愛想がいい。どうやら天真爛漫というか無邪気なお人柄のようだ。料理自慢で、彼女のもとにスーパービジョンに訪れる研修生らにお手製のものをふるまった。Anne Cebon がその体験を綴っていた(2007)が、毎回コーヒーと一緒にアップルタードルが出てくる。あまりにも高カロリーだから恐る恐るご遠慮申し上げたら、次回からスープが出てきたんだとか。こちらのお腹具合なんかにはまるで無頓着。自分の与えるものを欲しがってもらえるものと決めてかかっているふうだから愉快だ。誰も彼女がくれるものは喜んで貰うしかない。そんなふうによくの人たちは‘餌付け’されていったように思われる。その最たるものというのは、Mrs. ビックの‘売り’ともいえる新生児への優れた共感能力(empathy)なのである。誰も知りようがなかった赤ちゃんの‘心’をそれほどにも彼女が描写し得たことに人々は圧倒された。それも殊更に「死の本能」というものへの鋭敏な(過敏な?)感受性ともいえるもので。赤ちゃんは己のうちに拠りどころがない。だから彼女の言うところの崖っぷち(the dead end)に終始追い詰められていて、自壊への傾きにたえず脅かされ、バラバラに崩壊し、虚無へと墜落してゆく恐怖に晒されている。そのように描写された「死の本能」なるものの実態は、真裸で震え、もがき、むずかる赤ちゃんを目の当たりにするとき、あまりにもリアルに聞える。それを耳にし、その‘脅かし threat’に煽られ、身を竦ませ怯えてしまう。だからいかにもおどおどと‘コワレモノ’扱いの眼で赤ちゃんを観察してしまうことになる。赤ちゃんを目の前にして、体を強張らせ、ウンでもスンでもない、手も足も出ない状態で、ただ彼女らはこわごわ赤ちゃんを覗き見る。そして赤ちゃんに何を見ていたのかといえば、それはMrs. ビック自身がその生涯において幾度となく味わったところの窮地に追い詰められた、あの‘崖っぷち’といった恐怖の記憶でなかったか。(彼女はナチスの台頭ゆえに祖国を脱出しスイスに逃れ、英国に難民として迎えられている。)つまりそれが彼女のお弟子さんたちにそのまま‘感染’されて、その眼にそれが反復されたということではなかったろうか。この世に生きることはまさに受難だといわんばかりに、内なる迫害的苦痛に晒されている痛ましい赤ちゃんといったイメージに凝り固まっている。実際のところ、それを幾度か己れの内に彼女は見たのであり、その見たという強みを梃子にして、「死の本能」を縷々語る人はMrs. ビック以外におそらくいなかったろう。彼女が一部の人たちに圧倒的な支持を得たとしたら、それ以外ではない。彼女の真骨頂はそれだ。「死の本能」なる、存在の根っこにある根元的な‘障り’、その全面的な崩落感。それがあまりにもリアルであるがゆえに、人々に衝撃を与え、かつその前に言葉なくひれ伏すしかなかったということにはならないか。根源的な脅(おび)えを Mrs. ビックならぬ‘ドラゴン’の爪に掴まれて…。それなども忘却の淵へと追い払い、ひたすら逃走する選択肢もなくはなかったろう。だがジーン・マガーニヤ始め何人が踏みとどまった。いみじくもジーン本人が語っているように、Mrs. ビックにとって自分が‘要らない子ども(unwanted baby)’になりたくないといった恐れも手伝ったろうけれど…。やがてエスタ・ビックそっくりに、その自負と気概を受け継いで、「死の本能」と闘う‘旗手’として彼女らは臨床の現場で果敢に生き残ってゆく。それぞれに…。ここに翻訳を試みたジーンの論文【Mrs. ビックの貢献; 重篤な摂食障害および広汎性拒否症のこどもたち】(2002)は、その奮闘の証の一つであろう。

そのようにして結ばれた師弟の因縁(えにし)を評することばを私は持たない。ただブラボー！としか・・・。

もともと独立不羈の気概のある Mrs.ビックはとことん自分の‘こだわり’を掘り下げた。そこで見えてきたものがある。「二次的皮膚 second-skin」といった概念がそれだ。崩壊の‘脅(おびや)かし’に晒されて、身を守るすべとしてのそれを・・・。

或時、岡真史という12歳で自死したこどもの遺稿集『ぼくは12歳』を読んでいて、その中にこんな一篇の詩を見つけた。(高史明・岡百合子編 1976 筑摩書房)

ぼくの心

からしをぬったよ

体に

そうしたら

ふつうになったんだ

よっぽど

あまかったネ

ぼくの心って

クスツと笑えた。そうだった！私にも覚えがある。彼の地での、あのとき・・・。もしかして Mrs.ビックもそうだったのかも知れない。異国での独り暮らしの心もとなさ。胸底に一粒の涙を抱きながら、崩れ落ちそうになる自分に何度も何度も‘心棒’を建て直したのであったろう。それで当然ながら体中に‘からし’を塗ることもあったろう。だから彼女の‘苛烈さ’は心の甘さ(柔和さ)を覆い隠すものであったろうと想像されるのだ。甘いとは‘愚かしさ’でもあると私は思う。彼女は十分に‘愚かしいひと’でもあったろう。まただからこそ彼女のお弟子さんらはそこに魅了されて、ついに離れずに彼女を支え続けたともいえよう。

彼女は心の内に多くの‘死にびと’を抱えていた。それは事実だろう。どれほど無念であったろう。だからこそ‘死にびと’たちと一緒に彼女は生きていた。そうして生き抜いたともいえる。何度となく崖つぶち(the dead end)ぎりぎりに踏みとどまりながら・・・。彼らの死を放置せずに、常に蘇りへと導くために、その契機として、観察の赤ちゃんたちは彼女にとって‘救済’ともなった。彼女の元に集うお弟子さんらが報告する赤ちゃんは彼女への‘貢ぎ物’といった感じが拭えないのだが。幼子一人ひとりの物語。その誕生、そして生きてゆくこと。しがみつくことも、そして離れることも・・・。それからさらなる新たな誕生、新しい一人(いちにん/a person)としての蘇りをそこに見たのだろう。ここに Mrs.ビックの強運を思う。

精神分析とは妙なものだ。その発展において、フロイトを始めとしてだが、どれほどの人がその固有なる人生において味わった苦難ゆえの心の傷痕もしくは歪みを‘捧げもの’としたか。詰まりは、精神

分析とはいつか己の「無明」からの脱出口を見出すところの道程として、それぞれにとっての「贖いの‘炉’」となるものだからなのだが…。だが、ここで依然として私のなかに未消化なものが残る。一概に「死の本能」を新生児に投影するのはどうやらお門違い・筋違いではなかろうか。そもそも赤ちゃんがそんなにヤワなものだと決めつけることは私には断じて出来ない。過去30年余経て今や新生児に関する実証研究の龐大な知見から僅かながらも窺い知れたことはそうした趣きとは断然異なる。確かに赤ちゃんは感覚連鎖の渦巻きのなかにいる。その目くるめくような動きの中を赤ちゃんは遊泳しているのだ。そして自ずから定位づけをしてゆくところの固有受容性感覚なるものがあるらしい。言うなれば‘自己参照枠’といったものが備わっているわけだ。つまりは己を抱える‘心的皮膚’の萌芽といってもいい。そして己自身の内側に己自身を留めておくための錨(アンカー)があり、また釣り糸の先の錘(おもり)のように、絶えず外界からの刺戟に対して探索もし、受容する体勢にある。譬えていうならば釣り人がそうであるように、じっと辛抱強く何かを待っているようだ。そしてちょっとでも錘に触れたものがあればピクツとする。その合図に<捕まえたあ！>と言わんばかりに。そんなふうの手ぐすね引いて外界からの‘呼びかけ’に対して身構えている。それが喜びだからだ！さらには秤(はかり)の分銅のような内にバランスを保つものも備わっている。選り好みも大いにするだろう。傍から見ても、<あらっ、この子はこれが好きみたいだわ…>ということが分かる。もしも母親の注意が逸れたら、自分へとその眼差しを向けさせることもするだろう。何らかの剥奪状況(もらえるはずのものがナイ)としても、母親に罪悪感を抱かせるなり…、ゴメンねと言わせたり…。どうやらその躓きの心の傷つきから恢復するといった自己修復もしくは自己解毒(デトックス)の術をもわきまえているようだ。赤ちゃんとは如実に積極的かつ能動的な生きものだということになる。言うなれば、自己調律的なコンテナなのである。そこに適切な感覚刺戟なり肉体的働きかけがあるならば、赤ちゃんはもはや受け身 passive とは言えない。ガンガン刺戟に対して‘攻め’のスタンスを取ってゆく。光も音も感触もすべての刺戟が自分への‘呼びかけ’となる。殊更赤ちゃんにとっては母親がそうであろう。その表情、匂い、声音、肌触りが…。それらに自分が呼ばれて、赤ちゃんは呼び返すかたちで、それらを己の中に己自身の一部として取り込んでゆく。本来その誕生の瞬間からして、赤ちゃんは‘名を呼ばれる存在’なのである。そのようにして経験に培われた中核が言うなれば主体、‘わたしなるもの’である。この主体はとことん内なる‘生の本能’に促され、外界の刺戟に対して‘攻め’の体勢を取っている。だから親に可能なのはそれに寄り添い、可能な限りの挺入れをすることだけだ。だから赤ちゃんに刺戟を与えることを躊躇し、おどおどこちらの動きを差し控えることはその赤ちゃんの攻めの動きを‘空振り’させ、挫かせてしまうことになろう。つまりは赤ちゃんを‘退屈させる’。それこそがタブーであろう。ここからさらに敢えていえば、親側に内なる‘脅かし threat’があれば、本来自由で果敢でたえず挑戦的であるはずの赤ちゃんの心身にとって阻害因子となる。母親がおっかなびっくりでからだを竦ませ、感覚を麻痺(停止)させているとしたら、赤ちゃんに与えられた(available)ところのからだは強張り、萎縮しているわけだ。そうすると、その呼びかけは赤ちゃんに届かず、また自分が呼びかけられていることを知らないままに感覚を遮断し、外界に向けてからだを閉じてしまう。だとしたら肝要なのは、赤ちゃんに感覚の刺戟を与え、肉体的な動きを与えることに親が臆病であってはならないということ。絶えずおおらかにゆったりと構えて、我が子に呼びかけることなのだ。しっかりと手で触れ合いながら…。

つい最近だが、「赤ちゃんマッサージ」との関連で、一つ或る面白い動画をYouTubeで発見した。「Le massage du nourrisson」というタイトルだが。セネガルのタガールという或る村落でのこと。母親が新生児の我が娘にマッサージを施していた。それはインドの母親のそれと比べても格段に‘過激’というか、徹底していた。赤ちゃんの首筋を横へ捻る。さらには首を両手に抱えて持ち上げた。足を持って逆さ吊りしたり、体中をいじくり回し、こねまわし捻り、揉み、からだごと揺する。勿論この間赤ちゃんは折々にギャンギャン泣きもする。顔をしかめたり、ぐずり声をあげたり、びっくした顔で母親を凝視したり…。だが母親はびくともせず、一瞬の躊躇もない。掌を傍らの火鉢で温め、オイルを塗り、それを赤ちゃんの皮膚に押し付け、こすり、揉む。最後には赤ちゃんにチュチュとキスをする余裕もあったり…。その手業の適確さ、そしてまったくびくつくことのない、堂々たる態度には恐れ入った！なんと逞しいのか。competenceという言葉が浮かんだ。母親は逞しくも氣力が漲っている。実に壮快だ！そして赤ちゃんの皮膚は、おむつかぶれもアトピーも無縁ということを証してもいた。皮膚が‘いじけていない’。艶めいて弾力がある。健やかそのものなのだ。骨格も実にシャキッとしている。お見事！

私は一瞬、この動画をMrs. ビックに、そして彼女のお弟子さんたちにも見せたならどんな顔をするかと思い、内心可笑しかった。当然ながら‘child abuse(幼児虐待)’だとヒステリックに喚くだろう。さらにはアフリカ人を(インド人と同様に)‘野蛮人’だとおそらく侮蔑し、大いに牽制するに違いない。だが、やはり私はここに、ある種西欧化された我々現代人が置き忘れた母性の逞しさ(competence)の一面を見る思いがした。昨今私たちは皮膚の疾患をわずらい、からだの骨格の歪みに気づかされることが増えてきている。そこでどうやらヨガ、整体、オステオパシー(整骨療法)、鍼灸などが流行してるようだ。そして今やそれらが赤ちゃんにも適用されている現状があるらしい。東西を問わず今やベビーマッサージは子育てする親たちの間でブームとなっている。それは疑いもなく母親たちが赤ちゃんを触らなくなったということの裏返しであろう。物理的な刺激の不足が肉体的・精神的な発育の遅れやら歪みを引き起こしていることは今や自明ともいえる。

仔猫を一匹飼い始めた或る友人が私に語った。<ちょっとしばらくかまってあげないと、猫ちゃんの毛並みが悪くなるのよ>と…。それで触れ合っていると仔猫の毛並みが元に戻るとやら…。人間の赤ちゃんにしたって、体ごと与えてやる、かまってあげる、遊んであげることがもっとも必要なのだ。勿論のこと、保育器で過ごす未熟児なども大いに配慮すべきだ。その場合親はできれば一日に何度か赤ちゃんのところへ行って10分か20分かそばに座り、赤ちゃんを撫でたりいじったりしてやるべきだということが或本で提唱されていた。<こうした赤ちゃんの親は、チューブだの何だのという病院の装備に怖じ気づいてはならず、また赤ちゃんの反応がなくても(病院がいやな顔をして)めげてはいけない>と語られていて、殊更愉快に思った。そうなのだ。母親が怖じ気てしまい、気持ちがめげて、手も足も出なくなったら、それだけでも母子関係にとっては有害といえよう。<あなたは…>と呼びかけられ、そしてそれに応えんとする内側の促しがあって、赤ちゃんのいのちは目覚めるのだから…。その果敢なる(competentな)赤ちゃんの生きる意思を信じることなのだろう。こうした母子の呼応しあう密な関わりにはいかなる意味でも脅かしやら怯えを持ち込んではいならない。乳幼児観察に携わる観察者はそれを

肝に銘じるべきだろう。

ここでアフリカの母親に見倣えというのは土台無理な話だろうが、だがあのcompetence(逞しさ)から推して、Mrs. ビックのお弟子さんらの観察記録から透けて見えるのは観察者のincompetence(怖じ気)である。触ることやら抱っこすることをもう断然恐がっているのが解る。身が竦んで、心が赤ちゃんに焦点づけられないほどに怯え、びくついている。そして概して母親が感覚的刺戟やら肉体的な動きといった働きかけをすることを‘過剰’として否定的で、無言ながらも牽制しがちであるといった印象が拭えない。言語的介入はしないことになっているとしても、これではまずいだろう。

ここで一つエピソードを披露しよう。こんなものを見た！ 或る夕暮れ時のこと、私は近くのスーパーへ買い物に出掛けた。その路上で面白いものに遭遇したのだ。まだ2歳になったかどうか幼い男の子が歩いていた。まだ足元がちょっと危なっかしげであった。その後ろには少し距離を置いて、若い父親らしき人が付き従っていた。まず興味を引いたのは、その手に幼児用のリード(紐)があったからなのだ。あら、日本でもこんなのをを使うようになってるのかと私は懐かしかった。それは昔私がロンドンでベビーシッターをしていたとき、ウィリアムを散歩に連れ出すとき、同じようにそのからだにその紐を括りつけた。それで彼が少しでもつまずいて転びそうになると、間髪を入れず、私が手にしたその紐の先をグイと引っ張る。すると彼のからだは宙に浮くのだった。実に便利なのだ。ところが、その若い父親は手にした紐をたらんとしたまま、ゆったりと構えたまま、子どもの後に従っている。よくよく見ると、その男の子は、自分で自分の行き先を‘品定め’していた。それも決まって足元が危ないところを選んで、わざわざそちらへと歩を進めてゆくのだ。私などはつい<そっちは危ないわよ！ こっちへ来なさい・・・>と言いたくなるような・・・。電信柱と板塀との間のかろうじてからだが入るほどの狭い隙間へとからだをくぐらせようとしたり、それに路上のコンクリートの段差のあるところへとわざわざ向かってゆくのだ。彼はしばらく確かめるように段差に片足を乗せ、からだの均衡を測っているみたいだった。そして思い切ってもう片方の足をそこへ乗せて立つ。そして段差を踏み越えてゆく。それから段差から降り、また同じことを繰り返す。そんなふうに歩を進めてゆくのだ。わざと危ない目に遭おうとしているみたい。あらあら、なんでだろう？ 私は可笑しかった。彼はこの時点で‘いっちょまえの冒険家’であった！ でも内心では、<怖い、恐くない。怖い、恐くない・・・>と一人呟いていたのだろうか？ 彼は後ろを振り向かない。そして父親の方も言葉掛けをしない。ただ黙ったまま、付き従っている。紐はたらんと伸びたまま。<そっちはダメ、行っちゃダメだよ>とかは一切語っていない。この父親の悠揚さには内心私はほっこりした。何か深く感じ入るものがあった。男の子なんだから、ちょっとぐらいヤンチャでもいいと思っていたのかどうか、それは知らない。でも彼がちょっとつまずいて転んだとしても、この父親が大騒ぎしないだろうことは確かだ。このゆきずりの光景。父親と幼い男の子とのお散歩。そこに日常的に逃れ難くたえず己を脅かし挫かせんとする「死の本能」が子どもの内で果敢に挑戦されているのを垣間見たように思った。「生の本能」がそれに拮抗すべく‘綱引き’していた。負けるもんか・・・と敢えて危険に立ち向かってゆく。そしてその‘冒険の旅’からみごとに生還し、<ぼく、へっちゃらだもん！>と内心ほっと胸を撫で下ろし安堵する。そんなふうに「生きることへの免疫力」を自ら培ってゆく。この男の子のちょっぴり誇らしい気分が伝わってくるようではない

か。感動を覚えた！これをレジリエンス resilience(心の強靱さ)と呼ぼう。そしてこの場合のリードは勿論‘実用的な’ものであると同時に、象徴的ともいえるのではなかったか。それは、崖っぷち(the dead end)から引き返す‘命綱’として、〈大丈夫だよ・・・〉の呼び掛けとして・・・そして父と子の絆を意味する‘眼差し’として・・・この子が戻ってゆくところ、それはパパの懐、それが自分にはあるということだったろうか。だから、安心して敢えて‘冒険’に挑むことも出来たのだったろうか。つくづく子育てに脅かし threat は禁物だと思われた。〈おまえには耐えられない、おまえには無理だ〉は、言い換えれば〈私には耐えられない、私には無理だ〉だということではしかない。それで「死の本能」への誘惑に抗うことを阻むことになりはしないか。〈大丈夫だねえ。恐がらなくてもいいんだよ。面白いねえ・・・〉と言えたらいい。この「楽観」が子育てにぜひ欲しい。そして、心理臨床にも・・・それは即ちメラニー・クラインが言うところの‘the capacity for enjoyment(愉しむ能力)’であり、どうやらそれは M.クラインから分析を受けたというエスタ・ビックにも受け継がれてなかったはずもなからうが・・・。

ロンドンでの研修を終えて私が帰国の準備していた頃、1979年の秋、Mrs. ビックについての噂を耳にしている。引退後健康も衰え、抑うつ的な状態に陥っているとかだった。ふと《唄を忘れたカナリア》という日本の童謡が思い出された。〈唄を忘れたカナリアは、後ろの山に棄てましょか。いえ、いえ、それはなりませぬ・・・〉と。私はもの悲しかった。もう彼女は‘唄を歌えなくなっている’んだなと思った。彼女を必要としてくれるセラピイの患者がいてこそ、そして彼女に耳を傾けてくれるお弟子さんたちがいてこそ、彼女は「聞かれる人」であり、だから「唄う人」でもあったのだ。それがどんなに幸せなことだったのかと羨ましかった。いつか日本で私も「聞かれる人」になってゆくのだろうか？日本でどんな出逢いが待っているやら、まだ将来のどんな見通しもないままに、その時私はそんなことをぼんやりと考えていた。そしていつか心理臨床から去るときに、私はどんな私になっているのかしらとも思った。そこに一抹の後悔の念を覚えることはないだろうか。一生涯心理臨床に捧げるとして、それは誰かに自分を語りそして聞いてもらえる人になることであるのだから、その幸せを大事にしなくてはと思った。でも、それで果たして誰かを幸せにすることになるものやら・・・私はMrs. ビックとは違って、大いに内なる逡巡があった。【タヴィストック】を未消化なまま抱え、私は尚も不確実を引きずって帰国した。そのままこの歲月此地に根づくことに懸命で、いつか知らずMrs. ビックのことは念頭から忘れ去られていたと言っている。

ところが、つい最近のこと、KARNAC から Mrs. ビックの追悼集が編纂され、出版されたのを手にした。そこに Mrs. ビックの生涯及び業績についての紹介文《The Life and Work of Esther Bick》の記載があり、一つ或る箇所に注目した。1983年のこと、彼女の愛弟子ともいえるジーン・マガーニャたちが Mrs. ビックの息を引き取る数日前の或るとき、その病床に見舞いに訪れたらしい。その折になんと彼女から仕事はどんな具合かと尋ねられ、さらには彼女らしいコメントを口にされた旨を聞き知った。あらまあ、死の床にあってもまだ彼女は‘唄を忘れたカナリア’ではなかったんだと、私はなにやら嬉しかった。さすがにレジリアンスとは彼女のためにあった言葉なのかと・・・それを彼女の執念とか業とか言えばそれまでのことだが、かつて彼女に抱いたもの悲しさが幾らか私の中で払拭されるような思いが一瞬した。そして改めて己自身を振り返り、心した。やはり‘唄’を歌い続けなくてはと・・・。(2015/09/10 記)

\*\*\*\*\*

※参考文献;

- ・Andrew Briggs(ed.) (2002). Surviving Space—Papers on Infant Observation. Essays on the Centenary of Esther Bick. Karnac (books)Ltd. ; The life and work of Esther Bick. (p.xix.)
  
- ・Anne Gebon (2007). Supervision with Esther Bick 1973–74. Journal of Child Psychotherapy 33(2),221–238. Reprinted in The Tavistock Model. ed.M.H.Williams, pp.347–73. London: Harris Meltzer Trust, 2011.
  
- ・森茂起・大塚紳士郎・長野真奈訳;「精神分析への最後の貢献」～フェレンツイ後期著作集～ 2007. 岩崎学術出版社.; S. フェレンツイ(1929)「望まれない子どもと死の欲動」 &(1933)「大人と子ども間の言葉の混乱—やさしさの言葉と情熱の言葉」.
  
- ・M.ラスティン&E.ガグリアータ編;「こどものこころのアセスメント」～乳幼児から思春期の精神分析アプローチ～ 木部則雄監訳 瀧口のぞみ・柳井泰子訳 脇谷順子解説. 2007. 岩崎学術出版社 ; ジーン・マガーニャ. 第3章 「重度の摂食障害—生命への攻撃」
  
- ・ミラー・リカーマン. 飛谷渉訳;「新釈 メラニー・クライン」 2014. 岩崎学術出版社.
  
- ・トッド・デュフレヌ. 遠藤不比人訳;「《死の欲動》と現代思想」 2010. みすず書房
  
- ・ダニエル・N・スターン他. 北村婦美訳;「母親になるということ～新しい‘私’の誕生」 2012. 創元社.
  
- ・ダフニ・マウラ&チャールズ・マウラ. 吉田利子訳.「赤ちゃんには世界がどう見えるか」 1992. 草思社.

\*\*\*\*\*